

若い力で未来へ残す「棚田のある生活」

活動の経緯

約400年前の戦国時代から開田が始まり、最盛期には約10ha、3,000枚に及ぶ地域のシンボルでもあった棚田は、生産効率が悪く後継者の減少などにより、平成になった頃には、最盛期の1割ほどまで耕作面積は落ち込み、棚田の消滅と同時に、地域の活力を失うことが危惧された。

このため、地域の青壮年部が中心となり、平成6年「千枚田を考える会」を立ち上げ、未来に棚田を残すための活動を始めた。

活動の概要

棚田の再生（畑等への転換、景観作物などの植栽）及び棚田を活用した農業体験などのイベントの開催、ホームページなどでの棚田保全の普及啓発。



体験イベント「紅茶作り体験」



体験学習での田植え

活動の成果、主な実績等

①棚田再生、保全等の取組

静岡大生や企業等の協力により復田を進め、棚田の一部は世界農業遺産登録の「茶草場農法」に活用することにより、1ha程度だった棚田を令和元年には6haまで再生。

②棚田オーナー事業

平成22年から開始し、令和元年のオーナー数は50組、面積は1.5ha。

③農業体験等イベント、体験学習

地元産品を販売する棚田市場、紅茶作りやそば打ち、あぜ道アートなどのイベントにより、当初100人程度だった交流人口は令和元年には約2,700人を数える。大学生、地元女性組織など770人がボランティアで参加。

また、地元の小中学校の体験学習のほか、NPO会員が学校に出向き出前授業を行い、棚田の歴史や地域農業などについて啓蒙活動を実施。